TOPOS. TOKIWA POST

VOL. 28 WINTER

常磐大学
■大　学　院
■人間科学部　■国際学部
■コミュニティ振興学部
常磐短期大学
常磐大学高等学校
常磐短期大学 附属幼稚園

[2002.12.24.]

■発　行／学校法人 常磐学園　■編　集／学園報編集室　水戸市見和１丁目430-1　電話 029(232)0007　http://www.tokiwa.ac.jp/

Museum of Museology Open!

常磐大学 博物館学博物館 開館

ミュージアムの企画・運営を
リアルに体験する
博物館学を学ぶ博物館がオープン！

全国でも数少ない学内に設置された博物館「博物館学博物館」が平成十四年十一月十八日にオープンした。この博物館の設置目的は博物館学を担当する教員の研究・教育に資するために、また専門コースの学生はもちろん、博物館に関心を持ち、理解を深め、研究を希望する学生の教材や実技・実習に役立てることにある。この博物館の名称を「博物館学博物館」としたのも、この設置目的によるものだ。

当日は開館に先駆け、多くの関係者や報道陣を招いての開館記念式典、博物館内覧会が開催された。セレモニーでは大堀哲副学長が理事長挨拶を代読、諸澤正道理事長は「他に例のない、博物館学博物館の名にふさわしいユニークな博物館にしたい」と、今後の抱負を語った。

館内の展示は、広い範囲にわたる博物館学の中で、自然史、歴史、民俗などの展示を通して、展示形態や表現方法、照明方法、色彩、展示解説の手法などの理解を深めることを中心としている。さらに、この博物館には大きな三つの特色がある。その一つは「基礎的な八種類の展示法」即ちジオラマ、個体展示、複合展示、分類展示、生態展示、比較展示、参加・体験展示、歴史展示と、それぞれのテーマにあわせた展示法を用い、体験的な学習も可能にしている。二つめは「多彩な展示技術」。展示資料や解説装置のあり方、コンピュータの機能を活かした情報伝達、照明の種類と利用法、空間の効果的活用法などの手法を取り入れ、実際の場で理解が深められる。そして三つめが「他の学習施設との連携」。常磐学園のキャンパス内には、キンラン、ヒトリシズカなどの花が観察できる自然環境が整っており、これらと相互に連携した博物館活動も可能だ。

この「博物館学博物館」は、各専門分野の研究成果を社会へと発信する新しい「知」の創造・活用の場として、学生たちの学習意欲を高める施設となることを期待されている。

なお、日本博物館協会より、これまで蓄積されていた全国の大学や博物館における研究紀要、年報、図録等の博物館学関連図書が本学に寄贈され、現在整理中である。これらは、いずれ全国の研究者、学生等の希望者にも閲覧できるようになる予定だ。

〈博物館内覧会にて〉

「ウミウと鵜飼」のジオラマ

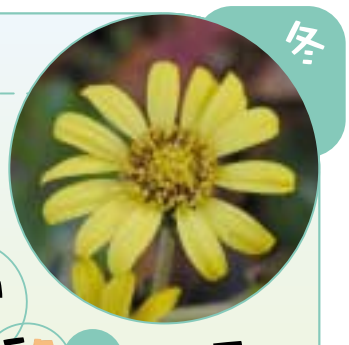
「貝・鉱物」の分類展示

理事長挨拶を代読する大堀哲副学長

常磐の四季　冬

◎シリーズ28　ツワブキ

木枯らしの季節に、暖かさを運ぶ黄金色の花



木枯らしが吹き初霜や初氷の便りを聞くころ、ツワブキは鮮やかな黄色の花を咲かせます。この植物の大きな特徴は、つやのある円い葉。この葉の形がキク科フキ属のフキに似て光沢があることから、艶葉蕗（つやはぶき）、艶蕗（つやぶき）と転訛したという説もありますが、現在では石蕗と書くことのほうが多くなっています。ちなみにツワブキはフキとは別のツワブキ属の植物。初冬の季語にもなっているように、晩秋から初冬にかけて、直径四～六センチの黄色い花を、十数個まとめて咲かせます。海岸の岩場に群生するほか、昔から日本庭園には欠かせない下草として、庭や玄関前の植え込みなどに植えられてきました。

昔からお茶受けとして食されていた「キャラブキ」は、このツワブキの若い茎を煮て作ったもの。市販品のほとんどは普通のフキを原料としていますが、本物はこちらだと言われています。

本学、体育館とF棟の間の雑木林に太陽の光を浴びて黄金色の輝きを放つツワブキは、冬枯れで彩りの乏しい季節に暖かさを届けてくれる貴重な花です。

※内容充実、情報盛りだくさんの常磐学園のホームページをぜひ御覧ください。
http://www.tokiwa.ac.jp/

Report

憧れのマウンドで真っ向勝負を挑む！

ドラフト会議で小野寺投手、久保田投手が指名

久保田　智之 Kubota Tomoyuki
●人間科学部・コミュニケーション学科
（埼玉県滑川高等学校 出身）
関甲新学生野球リーグ記録
2000年秋　1シーズン4完封
2001年春　連続7奪三振（対 白鷗大学）
最多勝5勝

小野寺　力 Onodera Chikara
●人間科学部・組織管理学科
（埼玉県鴻巣高等学校 出身）
関甲新学生野球リーグ記録
2002年春　ノーヒットノーラン（対 山梨学院大学）
最優秀防御率 1.07
2002年秋　最優秀防御率 0.24（暫定記録）

平成十四年十一月二十日に都内で開かれたドラフト会議で、本学から二人の野球部員が指名され来シーズンからプロ野球選手として活躍する見通しだ。

選ばれた一人は西武ライオンズから四順目に指名された人間科学部組織管理学科の小野寺力投手、そしてもう一人は阪神タイガースから五順目に指名された人間科学部コミュニケーション学科の久保田智之投手。本学から直接ドラフト会議で指名されるのは、今回が初めてのことだ。

ドラフト会議の当日は、学生ホールにある大型プロジェクターの前で、小野寺、久保田両投手が約百人の野球部員たちと会議の様子を見守った。そして午後三時頃に、西武ライオンズから小野寺投手が指名を受けるとホール全体がどよめきに包まれ、続いて阪神タイガースの指名が久保田投手に決まると、二人はガッチリと握手をした。

小野寺投手は、今春の関甲新学生リーグでノーヒットノーランを達成、直球と多彩な変化球が武器。本学卒業生で兄の進藤進さんも、元読売ジャイアンツの投手だ。この春最愛の母、初江さんを癌で亡くした小野寺投手は「母から苦しさを乗り越える精神力をもらいました。プロの世界でも苦難に負けず真っ向勝負で頑張りたい」と語った。

一方、久保田投手は、同リーグで二位タイの通算二十二勝。独特のトルネード投法から最高百五十三キロの直球を繰り出し、プロでは球界最速の百六十キロを狙う。マスコミは苦手という久保田投手は「一年目から一軍を目指し、マウンドに立てれば十勝はしたい」と言葉少なに語った。

小野寺投手、久保田投手という二人のプロ野球選手の誕生は、後輩である野球部員たちはもちろん、本学でスポーツに打ち込むアスリートたちすべての大きな励みとなる。今後さらにたくさんの学生たちが、さまざまなスポーツの世界で力強くはばたくことが期待される。

⬅大堀哲副学長と握手を交わす久保田投手

⬅母の遺影を胸に活躍を誓う小野寺投手

Campus Topics!

ときわ祭開催

2002.10.26（土）・27（日）

第20回を数える学園最大のイベント「ときわ祭」がたくさんの来場者を集めて開催！
多彩な企画を楽しむ、充実した秋の二日間となった。

初日は小雨まじりという悪天候となってしまったが、今年も二〇〇二年「ときわ祭」が十月二十六、二十七日の二日間、盛大に開催された。

今年のテーマは「なないろ」。これは、来場者にたくさんの企画を楽しんでもらいたいという思いが込められたテーマ。毎年恒例となっているさまざまな企画に、今年から始まったコミュニティ振興学部のゼミによる研究発表を加え、充実した内容を訴求することが目標だ。そして、それを表現したのが色とりどりの風船で飾られたゲート。昨年までは立て看板の設置だけだったが、今年はテーマを反映したバルーンアートのアーチが架けられ、虹のように夢のある学園祭を演出していた。

ときわ祭実行委員長
高野　有葵（こうや　ゆうき）
●人間科学部コミュニケーション学科

今回一番のイベントと言えば、ときわ祭実行委員会の主催で行われた「お笑いライブ二〇〇二」。出演者は、DonDokoDon（ドンドコドン）、三瓶、アップダウン、田上よしえといった、いま話題のメンバーたち。それぞれに独特のキャラクターで会場を沸かせ、二時間の公演時間はあっという間に過ぎ去った。

ときわ祭実行委員長を務めた人間科学部コミュニケーション学科の高野有葵（こうや　ゆうき）さんは「企画の数や内容では、自分が経験した過去三年間の学園祭で最高の出来だったと思います」と自信たっぷりに語り、来年も頑張って欲しいと後輩にエールを送っていた。

国際特集

私たちも地球で生活する人間の一人であることを
実感させられる出来事が
世界中のあちこちで起きている。
宗教問題、民族問題、
そして地球規模での環境汚染…。
自分で見てみないと真実は分からないけど
まずはこの「国際特集」で
いままで知らなかった世界を疑似体験してみよう！

国際学部では毎年、発展途上国の現状を肌で感じ、国際協力の大切さを学ぶ「青年国際協力実習」を行っている。今年はNGO「オイスカ」の協力を得て、植林等体験ツアーが設けられ、本学の参加学生十四名が参加した。

場所は東マレーシア・北ボルネオのサバ州で、ツアー期間は十三日間というスケジュール。しかし、マレーシアは国土面積の約六十四％が森林だと言われている。なぜそんな地域に植林が必要なのかと言うと、まず、焼き畑農業やエルニーニョ現象で被害を受けた森林が多いことが上げられる。そして、良い木は日本に輸入してお金にするため伐採されているのだ。さらに四年くらい前に大きな山火事があり、その後、木材には適さない木しか育っていないという。つまり産業として成り立たないわけだ。そこで日本が輸入した木材の分だけ、日本人が植林しようというのが今回の試み。また、マレーシアには緑が多いため、木をいくら伐採してもその分を植えるという習慣がない。木は無尽蔵の資源だという認識が一般的で、大切に守り育てようという発想はほとんど見られないのが現状なのだ。今回はこうした現状も踏まえ、オイスカの「ラブ・グリーン・プロジェクト」にも参加。子どもに木の大切さを知ってもらうため、現地中学校の生徒たちとペアになっての植林作業も行った。

このツアーのもうひとつの目的は、現地の人たちとの親交を深めること。そのため、途中、一度だけあるウイークエンドを農村でのホームステイで過ごした。学生たちの中には、まだ電気が来ていなくてロウソクの灯りで夕飯を取ったものもいる。しかし、それも日本ではなかなか出来ない貴重な体験。自分たちの日常を考える、絶好の機会にもなる。

今回ホームステイを行ったのは、バンバン村と言うところ。ここはイスラム教徒が多くすむ地域だが、カトリックの家庭が多く選ばれた。それでも食べ物や習慣の違いに驚かされることも多く、男でも水浴びをするときはパンツを脱がないなど、上げればきりがない。

海外ボランティアというと、治安、衛生、宗教などについての不安から敬遠する人も多いかも知れない。しかし学生たちからは「日本にいたら一生分からないことを経験できた」「いままでとまったく違う考えを持つようになった」など国際協力への関心の高まりを表す声も多く、感動していることもまた事実だ。

プレアテア小学校開校式

●カンボジアに学校を贈る会（ASAC）

初めて訪れた時に、”働くならカンボジアがいいな“と思いました。

榊原　寿幸　国際学部国際協力学科／第一期卒業生

在学中は、多くの時間をボランティアと海外の旅に費やしました。関わったボランティア活動は十個以上、訪れた国も十ヶ国以上に及びます。

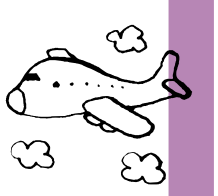
そんな中、僕の将来を決めるきっかけとなったのが、大学三年の春休みの東南アジアへの一人旅。初めてのバックパッカーだったので、もちろん不安もありました。でも、いろんな人との出会いや現地人とのふれあいなどを通して、さまざまなことを学びました。

このとき初めてカンボジアに入国。カンボジアで学校を贈る会（ASAC）の活動を見させてもらい、少しだけボランティアを体験しました。ほんの十日くらいの滞在でしたが、カンボジア人の懐っこさ、やさしさ、そして貧しさに触れ、働くならカンボジアがいいなと思いました。また、実際のNGO活動に、夢ではない現実の厳しさも垣間見ることができました。

成人識字教育修了式

結局、海外への夢が捨てきれず、卒業から一年後、百万円以上のお金を貯め、バンコクまでの片道切符を片手に、いざカンボジアへ。飛び込みでASACの仕事を始めていました。

現在の仕事は、会計、学校建設のための事業計画、完了報告、翻訳などの事務。それに、開校式などで会を代表してクメール語でのスピーチ、ツアーガイド、識字教室の毎月の教師月例会への参加、視察、調査などのフィールドワーク等々、雑用から代表代理まで何でもやらなければなりません。仕事は慣れないことが多くて大変ですが、カンボジア人の喜んだ顔を見るときと、心が通じたなと思うとき、仕事のやりがいを感じます。また、普通の旅行では行けないような所へ行けるので、深くカンボジアという国を見ることができるのも魅力です。また、スタッフと話しているときに、実際のポルポト時代の話などが聞けて勉強にもなります。何にしろ自分が夢見た国際協力の前線で働いているので、どんなに大変でも楽しいですね。



カンボジアに学校を贈る会（ASAC）

現在、カンボジアでは長い内戦が終わり、国の再興をめざして歩んでいます。しかし、その傷は深く、男の子たちの多くが戦死したため、人口の40%は15歳以下の子どもで、成人の3分の2は女性、平均寿命は50歳未満。戦禍により教育環境も貧しく、学校は2万教室不足していると言われています。

ASACでは1994年に活動を始めてから、2002年6月末の時点で、63校の学校（小中学校、修復含む）を建設。また、学校附属図書館の建設や、成人識字教育の実施、井戸掘りなど、幅広い支援活動を行っています。

◎一緒に活動しませんか？

ASACでは現在若者の国内・海外ボランティアを必要としています。もし何かできることがある人は、連絡をください。

◎お問い合わせは事務局まで

〒277-0025 千葉県柏市千代田3-12-105
TEL＆FAX　0471-67-6360
0471-66-2545
0471-66-2895
ホームページ　http://www.asac.gr.jp
E-Mail　ASAC@bigpond.com.kh

●青年海外協力隊（フィリピンミンダナオ島）

さらなるステップアップに向けて学ぶべきことはたくさんあります。

稲葉　りか　国際学部国際協力学科　第一期卒業生

フィリピンの人々と交流を深める。

国際学部での思い出といえば、まず、二年の時に初めての海外旅行（海外研修）で一か月インドネシアを縦断したこと。開発途上国と呼ばれる国を初めて自分の目で見ることができました。それまでは豊かな日本、それも故郷の静岡と茨城だけが私の世界でしたが、そこには、人種や文化、思想、言葉、宗教、環境、生活等、それぞれ異なる世界が存在していました。

その時インドネシアにやはり貧しさを感じましたが、物質的な豊かさを日本と比べる事自体間違っていたのかも知れません。とにかく、この旅が実際問題として国際協力について考えるきっかけになったことは確かです。

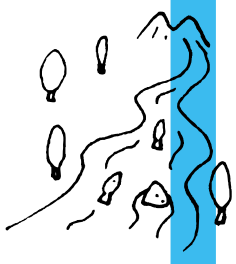
現在の仕事（ボランティア）を志望した理由に答えるなら、「夢だったから」ということでしょうか。しかし、就職を現実に考えた際に、海外でボランティアをしたくても文系大学出身者への門は狭いのが現状で、例えばJICA等は難関です。心のどこかで国際協力関係の仕事に就きたいという気持ちを抱きながらも、それは夢だから、現実は甘くないんだと分かったふりをしてあきらめ、いったんは企業へ就職をするという道を選びました（一応内定も頂きました）。しかし、心のどこかで何かすっきりしません。そこで思い切って、協力隊の応募説明会に足を運び、後悔しないためにも、受験してみようと思ったのです。

現在の職種はマングローブの植林などの養殖ですが、それだけにとらわれず、国際学部で学んだ多角的な知識を利用し、私自身にできることを積極的に行っています。

子どもたちに囲まれて。

当初赴任したばかりは、右も左も分からない状態でした。しかし時が経ち、フィリピンの人々と共に生活し、仕事をしていくことに喜びを感じるようになりました。特に、後に残るプロジェクトが完成したときには、現地の人々の笑顔や、今までの苦労を共にしてきた日々が思い出され、喜びと達成感が湧いてきます。その時が一番やりがいを感じる瞬間でもあり、同時に次の仕事への活力にもなっています。

しかし、この活動は、将来のための通過点でしかありません。できることなら国際協力関係の仕事に就きたいと考えており、まだまだ学ぶべきことがたくさんあります。狭き門ということも確かですが、青年海外協力隊に参加した経験を生かし、さらなるステップアップを目指したいと考えています。



国際特集

●CVSG（カンボジアビレッジ・サポートグループ）

私がくじけそうになったとき助けてくれたのは子どもたちの笑顔でした。

田宮　真紀子　国際学部国際協力学科／第三期卒業生

私は自分の夢に対する理想像がありました。それは、お金で全ての問題を解決するのではなく、人が本来持つ心、そう、人間の根本で人を助けたいという思いです。そしてその中でも、戦争や社会的な迫害・被害に遭った貧しい人々を、少しでも幸せにしてあげたいというのが私の希望でした。そんなある日、偶然にも私の理想を形にしたCVSG（カンボジアビレッジ・サポートグループ）をインターネットで見つけ、さっそく、代表とコンタクトをとったんです。するとボランティアなら歓迎というご返事をいただき、CVSGで働くことになりました。

私が働いていたカンボジアには、まだ数多くの地雷が埋まっていて、その数は六万個以上だと言われています。その被害に遭うのは、ほとんどが農民です。平凡に暮らしていた人たちが、ある日突然手足を地雷で失ってしまう。

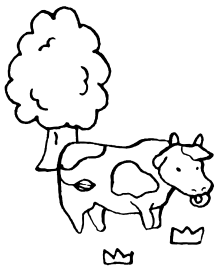
どこの国でも子どもの視線は真直ぐだ。

地雷の被害者は、現在でも増え続けている。

すると、手足の治療費だけで今までの生活費は奪われ、いきなり貧しさのどん底の生活を送ることになってしまいます。被害者が父親だったら、働き手を失ったという意味で、事態は深刻です。その日一日を食べて行くのが精一杯で、結局街に出て食べ物やお金を、恵んでもらうしか生きる方法がないのです。

私はこうした人たちを支援するセンターで、日本語・英語教室や里親制度の書類作りなどをしていました。こう書くと、カッコいい仕事のように思われますが、実際はとても簡単なこと。正直言うと、センター内の子どもたちと、毎日戯れていただけのような気もします。最初は言葉が通じず、順調には行かない点もありました。でも、お互いを知っていくに連れ、信頼関係も芽生え、なんとかやっていくことができました。やはり結局援助とは「人」と「人」との関係。私がくじけそうになったときに助けてくれた子どもたちの笑顔を、私は一生忘れないでしょう。

カンボジアで水は最も大切な資源の一つ。それは人も動物も変わらない。



Circle Flash!

サークル紹介

第12回
手話サークル
ベルボア

手話は特別じゃなく たくさんある「言語」のひとつ！

手話というコミュニケーションの方法は知っていても、手話で唄う歌となると聞いた（見た）ことがある人は少ないのではないだろうか。手話サークル「ベルボア」は、この手話の歌をはじめ、さまざまな角度から手話とふれあい、手話を考えていくサークルだ。

部員数は十一名。通常の活動は月曜日と木曜日の週に二回、五時三十分から二時間ほど行われている。活動内容は、お互いに声を出さず手話や身振り手振りだけでコミュニケーションを取ったり、手話を使わずジェスチャーのみで単語や絵の説明をしたりとユニークだ。もちろん指文字や例文を使って手話の勉強もする。しかし、手話で最も大切なのは表現力だと考えている。

手話の歌もその一環として取り入れられた。昨年十二月の合宿では、国際学部国際協力学科三年の小室洋輔部長の企画で、仙台で活動する聴覚障害者バンド「フリーダム」のイベントに参加。このバンドのメンバーでもある小室部長は「感情表現というのは手だけではなく、表情や身体全体を使うものだ」ということを部員に理解して欲しかったという。

こうした学外活動を通し、今後さらに、ろうあ者の方たちとのふれあいを深めていく考えだ。

「僕は引っ込み思案で自己表現は苦手でしたが、最近は積極的になってきました」と人間科学部人間関係学科一年の内藤岳郎さんが語るように、ベルボアは手話をひとつの言語、自己表現として考えるサークルだ。

⬅中学から手話を始めた小室部長

➡ときわ祭では手話コーラスを披露

アメリカから学生が訪問

村山　元理
国際学部専任講師

アメリカのカリフォルニア州立大学アーバイン校（UCI）の学生であるアーチー・タンさんが水戸を訪れ、一年半ぶりに国際学部の学生たちと再会を果たした。

国際学部の「海外研修Ⅰ」では、毎年春休みに四週間の語学研修を行っている。現地では午前中はコミュニケーション能力を重視した英会話のコース、午後はフィールド・トリップやカンバセーション・パートナー（CP）ミーティングなどがある。CPとは会話のパートナーとなるUCIの学生のことで、四人の常磐大生に一人のCPがつき、班ごとに活動を行っていた。アーチーさんは四人いたCPの一人である。CPと常磐大生は、デニーズのランチの出会いに始まり、ロサンゼルスツアーを一日一緒に過ごすことで、かなり親密な関係になった。修了パーティーに向けた班別の出し物もCPが指導し、連日の練習を通じてさらに濃い友情関係が結ばれた。修了後もメールや手紙の交換を続けている。実は、昨年の夏に別のCPも水戸を訪問している。アーチーさんは在校している常磐大生との同窓会に招かれ、卒業アルバムの撮影にも出るなど超多忙な日々を送り、九月二十七日、友人たちに成田空港まで見送られ、後ろ髪を引かれる思いで帰国した。

★★★

きらりん
KIRARIBITO

国際学部
国際協力学科・4年
山口　泰範
★
NPO 開発教育協会
（DEAR）

外に行くだけが国際協力じゃない！

私が所属するNPO「開発教育協会」とは、開発教育を啓発している市民団体。俗に言う南北問題（アジアやアフリカなど南で暮らす人々の飢餓や貧困などの問題）をはじめ、開発問題や人権問題など、世界や地域で起きている問題と自分たちの生活との関わりを知る。そして、その原因や解決策を考え、セミナーなどを通して伝え、行動を起こすという活動を行っています。

僕が国際協力に関心を持ったのは、高校時代に二年半、ニュージーランドへ留学したときのことです。その頃、近海でフランスが核実験を行い、世界中の環境保護団体が集まっていた。そこで国際的に活動する職員に触発されたんです。それで「国際協力学科」を設置している「常磐大学」に入学し、大学一年の夏休みにアジアへ行ったのですが、日本とのギャップにショックでした。それは、生活習慣や文化の違いではなく、先進国との「格差」のギャップです。この現状を見たからには、皆に伝えなければならないという責任感が湧き、現在の活動を始めました。

今年は発足二十周年記念事業として、全国三十七都道府県を巡るキャラバン隊にも参加しました。国内でも起きているさまざまな問題と地域の人たちの取り組みを肌で感じ、またひとつ成長できたような気がしています。

⬆開発教育リレーキャラバンに参加（北海道にて）

⬆小学校での開発教育のワークショップ

諸澤幸雄先生ご逝去を悼む。

昭和四十九年に本学園理事長に就任して以来、十八年間、学園発展に尽力された諸澤幸雄先生が平成十四年九月八日に亡くなられました。享年九十四歳でした。

諸澤先生は本学園外でも茨城県私学協会長、茨城県私学教育振興会理事長、日本私立短期大学協会常任理事などの要職を務め、教育振興における功績は枚挙にいとまがありません。

また昭和四十五年教育功労者として文部大臣より表彰、同四十七年藍綬褒賞受賞、同五十四年勲四等旭日小綬章受賞、同六十二年私立中学高等学校教育振興功労者として表彰されました。

諸澤先生の地域社会の教育文化向上に対する貢献は多くの人々が認めるところであり、ここに謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

時と文化を超えた人間としての理解を追求

■国際学部・国際協力学科　依田 泉助教授に聞く　―民族と文化―

考古学の分野からメソポタミア文明にアプローチする一方で、現代社会での異文化理解に関する授業を行う依田先生。一見、別の領域の学問のようにも見えるがこの二つの研究は、非常に共通点が多いという。考古学と異文化理解をつなぐ要素とは果たして何なんだろう。

Profile

よだ　いずみ
エール大学大学院中近東言語・文明科学博士課程修了。専門は古代西アジアの言語と歴史。●日本オリエント学会、日本言語学会、日本西アジア考古学会会員。国際学部専任講師を経て平成十二年十月より現職。

古代への憧憬が導くシュメール人の文化理解

紀元前三一〇〇年頃、ティグリス川とユーフラテス川の間の地域に、ひとつの文明が誕生した。シュメール人が築いたメソポタミア文明だ。依田先生は、この古代文明の残した文字を手掛かりに、シュメール人たちの生活・文化を解き明かす研究を行っている。

「私の研究はメソポタミア文明の中でも紀元前二三〇〇年から二一〇〇年頃が中心です。この頃に現時点では最古と言われている文字が登場しました。最初は象形文字から始まって、後に楔形（くさびがた）に変化する、楔形文字ですね。この文字で書かれた文字記録を解読することで、古代人たちの考えていたことや暮らし方などを、詳しく知りたいと考えているんです」

もともと法律学を専攻していた依田先生が考古学に魅せられたのは、法思想史で古代メソポタミアのハムラビ「法典」と出会ったのがきっかけだ。楔形文字で書かれた法律文書を研究するうちに考古学への関心が高まり、現在ではみずから現地（現在のイラク）で発掘も行っている。

●'01年9月に行われたキシュ遺跡での発掘調査

「第一回目の発掘調査は五年前ですね。さまざまな分野の研究員が参加している総合チームに加わって、イラクの「キシュ」にある遺跡の調査を行いました。王宮や神殿などを探りながら、文書庫に眠る記録文書も発掘します。当時の文書はほとんどが行政や支配者に関する内容ですが、羊や麦、さらに建築物を建てる木材などをどこから運んできたのかなど、当時の生活ぶりが偲ばれる間接的な情報を得ることもできます。ビールに関する記述などを発見すると、なんだか親近感が湧いてきますよね」

二回目の発掘調査は昨年の九月に行われた。この時はちょうどアメリカで起きた貿易センタービルのテロ事件の影響で、十日あまりでの帰国を余儀なくされた。

「考古学と言っても、結局人間を扱う学問。そこには、いまも昔も変わらない人間としての共通性がたくさんあって、そこが不思議で魅力的なんです。これを現代に置き換えると、違った文化圏に住む人と分かり合えたときの感動にとても近いんじゃないでしょうか」

日本人の想像を絶する衝撃的な異文化を紹介

依田先生が行う授業で、こうした異文化理解を追求しているのが『民族と文化』だ。衣食住、宗教、音楽・芸能、家族など、テーマ別にさまざまな民族の文化を紹介し理解を深めている。

「私の授業の特色のひとつは、ビデオ映像を多く取り入れていることです。私たち日本人の感覚では想像できない、ある意味でカルチャーショックを与える映像を見せ、その受け止め方を考えていきます」

例えばチベットの鳥葬。現在でも一部の地域に残っているこの風習は、身内が亡くなると、儀礼の場で遺族がその遺体を切り刻み、鳥に食べさせるというショッキングなもの。亡くなった人の魂を、遺体を食べた鳥たちが天に運ぶと考えられているのだ。

「もちろん、ただ衝撃を与えるだけじゃありません。鳥葬などが行われる背景には、どういった文化や考え方があるのかを解説し、もし自分たちがそこにいたらどうするのかを問いかけて行きます。文化がいかに人間を動かしているのかを、少しでも感じてもらいたいんです」

これは異文化交流はもちろん、ビジネスや国際協力の場でも幅広く要求される知識でもある。相手の文化的背景を理解することが、経済的にも政治的にも円滑なコミュニケーションを可能にするのだ。

大切なのは、相対的に自分自身を捉えること

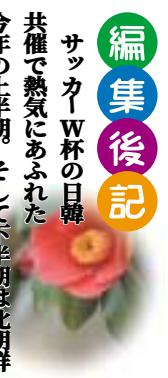
「すごく離れたチベットのような世界だけでなく、家族でも友だちでも個人の持つ文化は違います。ですから、その人たちが何故そのような行動をとるのか、それを掘り下げて、理解して行こうという姿勢を常に持ってもらいたいですね」

そして他の文化を理解するためには、自分自身を突き放して捉える必要もあると依田先生は言う。

「例えば、鳥葬を習慣としている民族から見ると、私たちはどう見えているのか…。もしかしたら、自分たちの方が変なのかも知れないって学生たちに思ってもらえたら成功ですね。相対的になると言いますか、自分を軸とした見方、考え方を変えることが異文化を理解する大きな一歩になると思います」

日本の国際化が進む今日、互いの文化を生活レベルで理解する依田先生の授業は非常に重要な役割を担っている。

編集後記



サッカーW杯の日韓共催で熱気にあふれた今年の上半期。そして下半期は北朝鮮日本人拉致や国際テロ、そしてイラクの核開発問題など、暗い話題が日本を駆け巡った。こうして見ると二〇〇二年は、さまざまな意味で国際化を肌で感じさせる年になった。これまでは主に政治やビジネスの分野で考えられてきた「世界の中の日本」は、市民レベルでも真剣に取り組まなければならないテーマとなっているのだ。

今回取り上げたNGOで働く本学の学生や卒業生たちは、自分の意思で地球市民としての支援活動を行っている。自分の目で見、肌で感じた疑問に対し、行動することで答えを出そうとしているのだ。本当の意味での日本の国際化は、ここから始まるのかも知れない。

＞＞＞第６回常磐フォーラム開催＜＜＜

「ザ・サード・ジャパン（第三の日本）モデルを構想する」

―21世紀の社会活力を創造する コミュニティ・地域企業・大学のアライランス―

地域社会と大学との相互理解を促進し結び付きを深める「第六回常磐フォーラム」が、平成十四年十月三十日、水戸京成ホテルで開催された。今回、講演者としてお招きしたのは多摩大学経営情報学部教授の望月照彦先生。「ザ・サード・ジャパン（第三の日本）モデルを構想する」というテーマで、社会的な活力を創造するアライランス（戦略的な提携）について講演が行われた。

講演は「コミュニティ時代の到来」「コミュニティに発生する問題点」「地域経済と産業」「地域企業と大学の役割」「地域ビジネス先行モデルの研究」「ザ・サード・ジャパンモデルは可能か」そして「日本のトスカーナ『常陸モデル』」という七つのブロックで展開。日本が現在の閉塞的な状況を抜け出し、第三の道をしっかりと歩んで行くためには地域と企業と大学の連携が必要であるということ、そしてイタリアのビジネスモデルをベースに「ザ・サード・ジャパンモデル」を打ちだし、今後の日本を支える茨城県についてレクチャーしていただいた。

講演終了後には、学生たちによる「コミュニティベンチャー」のプレゼンテーションも行われ、未来への可能性を強く感じさせる常磐フォーラムとなった。

学生たちのプレゼンテーション

多摩大学経営情報学部教授
望月 照彦先生